

アンサンブル・チコーニア 第2回公演
~~ 西洋音楽との再会・江戸と明治の音楽事情 ~~

一之巻

ルネッサンス残照

(安土桃山~江戸初期)

1-1 東洋のベニス「堺」と尺八の誕生



安土桃山時代、日明貿易・南蛮貿易で栄えた堺は「東洋のベニス」と称えられる自由都市でした。堺はこの時代に花開いた「南蛮文化」の中心地だったのです。町には中国、東南アジア、アフリカ、ヨーロッパからもたらされた珍しい品物や楽器が溢れていました。天文19年（1550年）イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルは畿内への布教のため堺に滞在します。畿内でも多くの大名や家臣がキリシタンとなりました。議論好きだった臨濟宗の僧でキリスト教に改宗する者も現れたといえます。堺の町には南蛮寺と呼ばれた教会が建ち、京や安土の神学校ではグレゴリオ聖歌が歌われ西洋の楽器も演奏されたのです。堺は茶の湯も盛んでした。キリスト教のミサの形式が茶道の形式に影響を与えたことは良く知られています。堺の豪商の茶室でミサが行われたことも当時の記録から判っています。

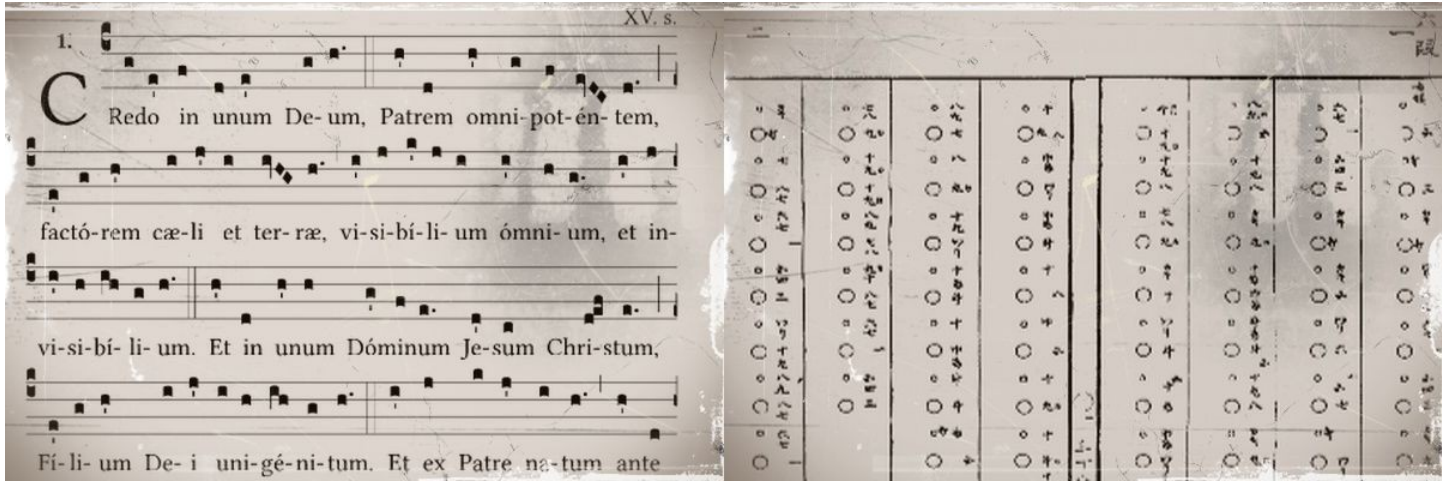
豊臣秀吉が天下人になると、繁栄を誇った堺の状況は一変します。秀吉の出したキリシタン禁教令により、多くのキリスト教徒が犠牲になりました。江戸時代に入ると幕府は隠れキリシタンの発見と強制改宗を積極的に進めるようになります。信仰を捨てずに生き残る為には、仏教徒を装うしかなかったのかもしれない。虚無僧尺八はこんな時代を背景に畿内で誕生したのです。

[演奏曲] 虚鈴

江戸初期に成立したと思われる尺八本曲「古伝三曲」の中の一曲。尺八起源伝説によれば、中国唐代の僧普化禅師が振り鳴らした鐸の音を竹管で模して吹奏した曲「虚鐸」が起源といわれているが史実かどうかは疑問。

今回は、浜松の虚無僧寺（普大寺）に伝承された曲をルネッサンスリコーダーで演奏します。

1-2 クレドの伴奏が六段になった時



1. XV. s.
Credo in unum De-um, Patrem omni-pot-ent-tem,
factó-rem cæ-li et ter-ræ, vi-si-bí-li-um ómni-um, et in-
vi-si-bí-li-um. Et in unum Dóminum Je-sum Chri-stum,
Fi-li-um De-i uni-gé-ni-tum. Et ex Patre na-tum ante

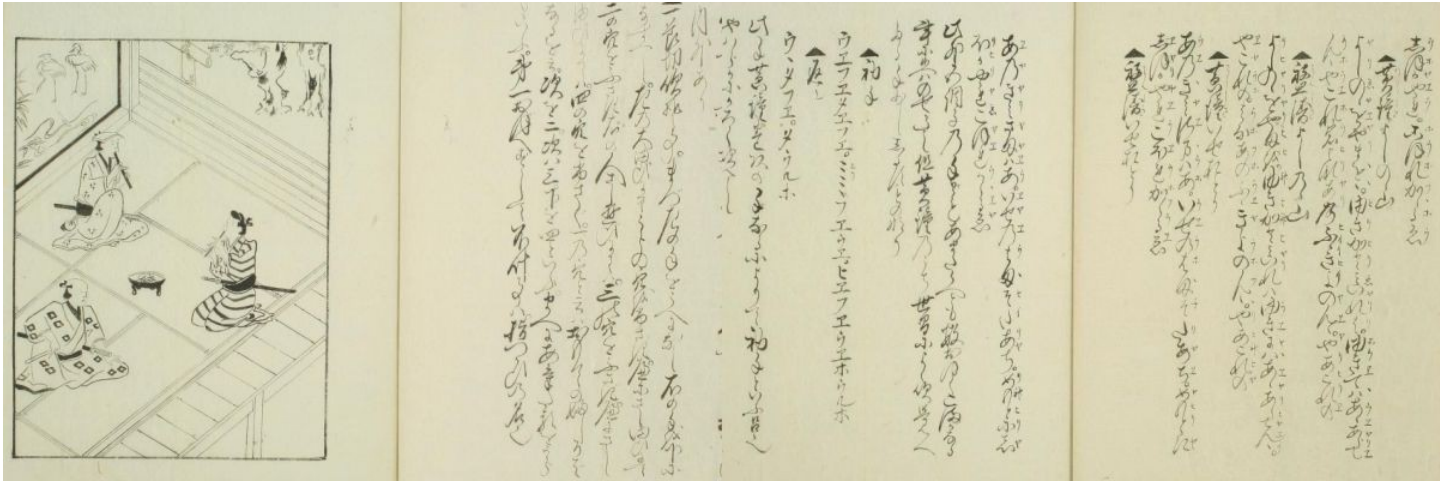
天文20年（1551年）目が不自由だった琵琶法師了齋（りょうさい）は、周防（すおう）国山口の街角でフランシスコ・ザビエルと出会います。了齋は、ザビエルからロレンソという洗礼名を受けキリスト教徒になりました。永禄6年（1563年）正式にイエズス会修道士となったロレンソは、ザビエルからミサで歌うグレゴリオ聖歌も学んだのです。永禄8年（1565年）畿内から九州に赴いて宣教活動を行ったロレンソは、豊後国府内で筑紫箏（つくしごと）の創始者諸田賢順と出会います。賢順は、ロレンソからミサで歌われる聖歌「クレド」とその伴奏を学びました。賢順が50歳を過ぎた頃、時代はキリシタン禁教に向かって徐々に進み始めます。賢順が弟子の法水（ほっすい）にこの曲を伝授した時、賢順は曲がキリシタンの音楽「クレド」の伴奏だったことを隠すために、3種類あった「クレド」の伴奏曲を繋げて「段物」といわれる現在の「六段の調」の形に変えたと考えられます。

江戸の初めの寛永年間、堺から伝わった三味線の名手として名を馳せていた八橋検校は、江戸で賢順の弟子法水と出会い筑紫箏を学びます。八橋は筑紫箏の曲を「庶民には馴染まない優雅な曲調」と感じ調弦方法を現在の平調子に変えました。原曲は教会旋法のような調弦だったのかもしれませんが。箏曲「六段の調」は八橋検校の作として今に伝えられ、現在も演奏され続けています。

[演奏曲] CREDO× 六段の調

グレゴリオ聖歌「クレド」と八橋検校（1614年～1685年）の作と伝えられている箏曲「六段の調」を同時に演奏します。「六段の調」は、皆川達夫氏の研究によりキリスト教のミサ曲「クレド」を箏でパラフレーズしたものであることがわかっています。

1-3 糸竹初心集と一節切



江戸時代が始まって半世紀が過ぎた頃、時代は天下泰平の世になっていましたが、芸術文化の中心は未だ京の都でした。寛文4年（1664年）京都の秋田屋九兵衛は、中村宗三（そうさん）著による三巻の邦楽器の独習書「糸竹初心集」（しちくしょしんしゅう）を刊行します。内容は、上巻が一節切（ひとよぎり）尺八、中巻が箏（こと）、下巻が三味線の入門書で、各巻ともそれぞれの楽器と音楽の歴史的概観や演奏法についての簡単な解説文のほか、当時の流行歌謡と思われる歌詞に簡単な楽譜を付したものが記載されています。三巻の中で共通の曲もあることから、これを比較することで当時の流行歌曲と器楽曲の実態を知ることができます。

上巻の尺八の入門書を見ると、この尺八が「一節切」尺八であることがわかります。現在使われているような尺八（普化尺八）は、まだ普及している楽器ではなかったのです。楽譜には一節切の運指法が記載されているため、音の高さはほぼ正確にわかりますが音の長さの記載がありません。音符の長さの記載は、箏と三味線の楽譜にも無く、当時誰もが知っている曲の楽譜としては必要がなかったのかもしれませんが。

[演奏曲] 吉野の山

寛文4年（1664年）に刊行された三巻の邦楽器の入門書「糸竹初心集」に収録されている曲。当時の京の都では、誰もが知っている流行り歌だったと思われる。

今回は、琴の伴奏による男女の歌に一節切と2本のリコーダーによる三声のカノンを加えたバージョン（編曲：山澤昭彦）で演奏します。